２０２４年度愛知芸術文化センター運営会議　会議録

１　日　時

2024 年９月 18 日（水）　午後２時 30 分から４時 00 分

２　場　所

愛知芸術文化センター１２階　アートスペースＡ

３　出席者

委員１３名

別添「出欠表」による

４　傍聴者

なし

５　知事あいさつ

６　議　事

(1) センター長あいさつ
(2) 各組織の部門長からの事業概要説明
(3) 各専門委員会委員長からの委員会報告
(4) 国際芸術祭推進室長からの事業概要報告

７　意見交換

＜大村座長＞

それでは、各委員の皆さまから、御意見、御質問をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

＜吉田委員＞

愛知県女性団体連盟の吉田でございます。２点お伺いしたいと思います。

まず、芸術文化センターにつきまして、先ほどの御説明に、「せっかくの企画展なのに入館者数が伸びなかった」というお話がありましたが、そもそもどのくらいを目指しているのか、目指すところはどこなのか、そのためにはどうすればいいと思っているのかという点をお伺いしたいです。

先程、資料の表から人の流れを見て思ったのですが、10 年前というのは、今の 75 歳以上の方々がお元気だったときです。その方たちが、10 年経って 75 歳以上になって、コロナ禍でなかなか外に出られなくなった。私どもの会もそうですが、お元気で、お金もあって、外にも出られるという立場の方たちが、いろいろなものすべてにおいて、集客として少し少なくなっていると思います。そのような方たちも足がお元気であれば出て来られるのですが、そうではないので、市町村でバスなどを御用意していただければ出られるのに

というようなお声も聞いております。お子さんがいる方達もそう思っていらっしゃるかもしれません。ですので、例えば、愛知県美術館が費用を出すという意味ではなく、それぞれの市町村の美術館や劇場が少し予算を使ってバスを用意して、こういう企画のときにできるだけ多くの県民の方に来ていただくというようなことをもしお考えであれば、バス会社の応援にもなりますし、お互いに助け合うことで、県民のための施設にもなっていくであろうと思いますので、そのあたりのお考えもお聞きしたいです。

それから、図書館について、地域の図書館の職員を交えての研修とありましたが、その研修をされた上での課題や何か見えてきたものがあれば、教えていただきたいと思います。そして、また、それをどう解決したいと思っているかというところまでお考えであれば、お聞きしたいと思います。

＜平瀬美術館長＞

美術館長の平瀬です。

１番目については、なかなか明確なお答えができるものではないのですが、展覧会の目標は展覧会ごとに決めており、総合的にこの展覧会全体で何万人ということを決めておりません。実を言いますと、コロナの影響が未だにあるというのはおっしゃるとおりで、中高年の方の動向をまだ読みかねている状況です。戻ったなと思うような展覧会も一部あるのですが、思ったほどは来ないというものもございまして、そのあたりは日々検討しながら対策を練っていくしかないと思っております。

一方で、ますます広報の形が変わってきておりますので、今後は積極的にＳＮＳなどのＩＴ等を使った広報についても考えていきたいと思っておりますし、また、例えば、もう少し専門的な人材に助けていただくというようなことも考えていきたいと思っております。

もう１つ、バスのお話につきましては、今後勉強していきたいと思います。一方で、現在も、展覧会で市町村に広報協力などをお願いすることがあるのですが、実際のところ、市町村も地元の公立施設を優先したいということが非常に多い状況です。具体的には申し上げませんが、この前の展覧会でも、「こういうことをお願いできないか」というお話をしたのですが、当該市町村の美術館からは、「全般としてお断りしている」というお答えをいただいたことがございます。そのあたりは、いわゆる縦割りという話もあるのかもしれませんが、今後は、他県も含めて、県や市町村とともに連携しながらやっていくことも模索していければと思っております。

＜加藤図書館長＞

図書館へお尋ねいただきました、市町村の図書館職員を交えての研修会の結果や見えてきたものについて、私から回答させていただきます。

コロナ禍が明けまして、現在は、まだリアルとオンラインの両方で研修しているという状況です。新任の職員向けの研修、児童向けのサービスの研修、青少年向けのサービスの研修、司書にとって一番重要なレファレンスの研修など機能別に行っております。

コロナ禍が明けましたが、まだ市町村立図書館の来館者数が伸び悩んでいるという現状があります。こうした中で、つい先日には、図書館を利用する要因、一言で言うと、「なぜ

図書館に行くのか・行かないのか」についてお話しいただく研修を実施しましたが、やはり市町村立図書館の方も、来館者数がコロナ禍前のようにはなかなか戻ってきていないと悩んでおられました。我々県図書館の大きな役割の一つは市町村立図書館のバックアップですので、引き続き、しっかりとニーズをとらえ、これに合った研修を行ってまいりたいと考えております。

＜大村座長＞
　それでは、伊藤委員お願いします。

＜伊藤嘉章委員＞
　愛知県陶磁美術館の伊藤です。
　まず、美術館についてお伺いします。資料１－１の「直近５年間の入館者数」という表には、トリエンナーレ（国際芸術祭）での入場者数が入っていると思います。今回、こういうときに、数字を見たり、グラフを見たりしたときに、「今年は下がっています」といった言い方をするのですが、実は、このトリエンナーレ（国際芸術祭）が入っていることで、見方の基準というものが随分狂っておりまして、逆に、正当な評価と今後の展望というものが見にくい表になっているのではないかと思います。トリエンナーレ（国際芸術祭）はそれ自体にすごく大きな意味があるので個別に見ていく必要があるし、全体の美術館としての運用も見ていく必要がありますが、これが両方混在することで見えにくくなっている、とそのような気がいたしました。
　それと、これはそれこそ愛知県陶磁美術館も抱えているすごく大きな問題なのですが、資料１－２にありました、「近代日本の視覚開花　明治――呼応し合う西洋と日本のイメージ」あるいは「幻の愛知県博物館」という、すごく変わった、とてもすごい展覧会が、昨年度２本ありまして、これらは「大量動員には繋がらないけれど、よくやった」というのが博物館員としても思った展覧会でした。これは我々博物館で言いますと、このような「博物館がしなくちゃいけない展覧会」というのがある一方、2021 年のジブリ展のように、「20 万人来てもらえるような展覧会」「これはできたらいいなと憧れるような展覧会」があります。その両方をやりながら、「しなくちゃいけない展覧会」をいかにやっていくのかということが館の評価を決めていきます。ところが、今この資料を見ていましても、入場者数と入場料収入しか評価基準や数字が出てきませんので、「やるべき展覧会をやったところは偉いぞ」ということは、運営会議の一言、一行にしかなりません。ですから、この点というのは、何とか評価をしてやっていく必要があるのではないでしょうか。逆に言えば、そういう展覧会をやるために、ジブリ展のような形で、多くの人に来てもらって楽しんでもらう展覧会もやりながら、一方で、「ここでしかできない」あるいは「愛知県だからできた」というようなことをやる、ということが必要なのかなと思いました。またどのように評価していくべきか、一緒になっていろいろ考えていけたらと思います。よろしくお願いします。
　あと１つ、図書館について、前から思っているのですが、図書館は前から５年計画とか、そういうものを出されています。また、運営会議の資料を見ましても、何をしようとして

いて、次に何をすべきで、それに関する評価というのがすごくしっかり出ています。逆に、なんで図書館というところはそれができるのでしょうか。我々陶磁美術館も含めて、美術館は夢を見ているものですから、甘くて、なかなかそういうこともできない気がするのですが、どういうことからここまでしっかりやっていこうというものが出たのか、それも教えていただけますでしょうか。

＜加藤図書館長＞
お尋ねいただきました、計画・目標の設定と、その進捗をどのように管理をしていくのかという点について回答させていただきます。
今年７月に開催いたしました図書館専門委員会でも御指摘をいただいたところですが、現在は、図書館の目的や使命が非常にわかりにくくなっている時代に入ってまいりました。2023 年の３月に第二期の基本的運営方針を定めましたが、その前の第一期方針は 10 年計画で、今回の第二期は５年計画にしてあります。というのは、第二期方針策定当時は、いわゆるコロナ禍やポストコロナで、急速なデジタル化の進展など非常に社会が激変したタイミングでありました。とはいえ、目標をしっかり決めて、それをトレースしてやり続けていく中にこそ、結果が出てくるのではないかということで、少し苦心しながら数値目標を立てました。今回、図書館専門委員会でも、量だけではなく、もう少し定性的な評価を入れたらどうかというような御助言もいただきましたが、当初立てた数値目標をしっかりと進捗させトレースをし、定性的な評価を加えたほうがいいタイミングであれば、その時々で改めてそうした目標を立ち上げていくような５年間にしていきたいと考えています。目標の進捗状況を検証して、クリアできるようであれば、さらにもう一段高いところに目標を置くとか、もう少し定性的な評価を加えていくというように柔軟に見直していければいいなと専門委員会の結果から感じているところであります。

＜大村座長＞
井上委員どうぞ。

＜井上委員＞
井上でございます。
今、伊藤（嘉章）委員がおっしゃったことが、私がまさに言いたいと思っていたことです。私は音楽の専門なのですが、企画展「近代日本の視覚開花」と「幻の愛知県博物館」を両方とも見させていただいて、これまでの美術館の企画の、何かまた全然別のところから新しいところに踏み出したという、そうした大変良い、去年見た中ではとても心に残った、勉強になる、それから今後の新しい展開が愛知県だけではなく予想されるものではないかと思いました。伊藤（嘉章）委員がおっしゃったように、この評価をどのようにしたら良いのか、それから、これを入場者数で見てしまったのでは少し残念ですし、もっと大きくいろいろと日本全国に知らせたいということが、まず１点思ったことです。
あともう１つは、また別のことです。愛知県芸術劇場の利用状況のお話がございました。その中で、利用率が他の劇場と比べても高いと、特にコンサートホールが 2024 年度は

89.8%で、この先は100%になる月もあるとおっしゃいました。これは、実は、「しらかわホール」が閉館したということが、かなり大きなファクターになっているのではないかと思います。しらかわホールは、700席の大変すばらしいホールで、音響的にも、「こんなにいいところはない」「なかなか日本全国でもない」というホールだったのですが、そこがこの３月で閉館になりまして、それまでやっていた、例えば、愛知室内オーケストラとか、他のところもみんなコンサートホールに移るようになりました。私は、愛知県にとって、しらかわホールがこれで使えなくなってしまうというのは、本当に残念でたまらないし、音楽関係者みんな同じことを思っているのですが、この先このままいくと、コンサートホールが満杯になって、100%の月がずっと続いていってしまい、ここに入れない団体が出てくる、ということを大変危惧しております。これに関してどのようにお考えか、お示しいただければありがたいと思います。よろしくお願いします。

＜浅野芸術劇場支配人＞
　愛知県芸術劇場の支配人の浅野でございます。
　お話のとおり、しらかわホールについては、様々な関係者から色々と話を伺っています。当劇場のコンサートホールは名古屋フィルハーモニー交響楽団さんを始めとした近隣オケの定期演奏会や、海外オケの招聘公演、各種学校利用等がされておりまして、それをどうすみ分けていくかが重要と考えております。愛知には４つのオーケストラがありまして、ご指摘のとおり全てのオーケストラの定期演奏会等を当劇場で開催してしまうと、日程が被ってしまうこと、他の利用者の方への影響が大きいことに鑑み、まずはオケの方々と利用調整の相談をさせていただいておりまして、名古屋フィルハーモニー交響楽団さんに中心となっていただき、事前に日程をずらすなどの調整をする、といったことを始めております。当劇場のコンサートホールは音の響きも良く人気のあるホールですので、ユーザー様の意見を聞きながら、なるべく多くの方に利用していただけるような方法を考えていきたいと思います。
　また、その副産物と言うか、四つのオケとそういった相談を始めたところ、来年度あたりからその四つのオケで一つの公演をやる、各楽章を別々のオケが演奏するという企画も出たりしております。そういった新しい文化活動も劇場が中心になりながらやっていきたいと考えておりますので、温かい目で見ていただきつつ、劇場も頑張って参りますので、今後もよろしくお願いします。

＜大村座長＞
　ありがとうございます。他にみえますか。

＜佐藤委員＞
　名古屋国際工科専門職大学の佐藤久美でございます。
　来年度は国際芸術祭「あいち2025」が開催されるということで、大変楽しみにしております。わたくしは、「あいち国際女性映画祭」のイベントディレクターを務めておりまして、2025年はちょうど30周年となります。開催の時期も９月の第２週ということで、この芸

術祭の開催時期と重なりますので、ぜひコラボレーションできると良いと思っております。
あいち国際女性映画祭にはコンペティション部門があります。世界各国から、若い女性映画監督から作品の応募があります。今年のドキュメンタリー部門の優秀賞を獲得したのはイランの女性映画監督の作品でした。イランの農村の生活を描く素晴らしい作品が、奥田瑛二委員長も含め、審査員全員一致で選ばれました。映画は総合芸術と言われます。空間芸術と時間芸術との総合芸術として、これからも多くの人たちがこの世界を目指してくると思いますので、ぜひ御支援いただければと思います。
今年は、韓国の「ジンセン・ボーイ」という映画を上映しました。出演者の女性アイドルグループ「KARA」のカン・ジヨンさんがウィルあいちに来てくださって、ウィルあいちに足を運んだことがない若いファンがたくさん来てくださいました。
女性映画監督たちに聞くと、愛知国際女性映画祭は非常に有名だと言います。「映画監督の中で、愛知は女性監督の映画を支援してくれるすばらしいところだと評価が高く、こうして応募ができて、さらにその作品が上映されたことを非常に喜んでいます」、という声をたくさん聞いております。どうぞよろしくお願いします。
そして、今回いろいろ御説明があって、本当に皆さんいろいろな企画をしっかりと立てて、素晴らしい運営をされていることがわかりました。この資料の中に「やさしい日本語落語報告書」というものがあって、非常に興味深く見せていただきました。この「やさしい日本語」は、外国の方たちにもわかりやすい言語として評価されています。特に緊急事態にこの「やさしい日本語」で伝えるということを、私も取り組みとして研究しているのですが、落語は海外でも非常に人気があるものですので、やさしい日本語を使った落語がこの愛知で行われていることを知って、興味深く拝見させていただきました。

＜大村座長＞
ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

＜伊藤真理委員＞
伊藤でございます。
改めて各館からの活動報告を伺うと、すごくたくさんいろいろなことをなさっているのだなと感じました。
そこで２点質問があるのですが、１点目は、様々な活動成果というのは、どこかでアーカイブはされているのでしょうか、ということです。演劇にしても、公演にしても、美術展にしても、先程の伊藤（嘉章）委員や井上委員からもお話がございましたが、「ここでしかできないこと」というものがなされているのであれば、やはりそれはきちんと保存、アーカイブしていくことで、それが今度は芸術大学とか教育大学の学生たちにも資する、貴重な資産になるのではないかと考えます。
それから２点目は、様々な活動を各部門でされているのですが、何かしら連携はないのかなと感じました。私は図書館が専門なものですから、ついそんな視点で見てしまうのですが、例えば演劇をする場合にそこで使われる資料とか、よく海外でもありますが、何か活動をするときに、活動するために必要な情報を横の繋がりで連携しながら提供していく、

そうすることで、もっと立体的で、深い鑑賞ができるということがあると思います。そうしたことを含めると、ちょうど愛知芸術文化センターは財布が一つであるわけですから、いろいろな横の繋がりで、様々なことが可能になるのではないかなと思うのですが、いかがでしょうか。

＜上野管理部長＞
管理部長の上野です。
事業概要説明でも御説明させていただきましたが、私どもの管理しております場所に、アートライブラリーがございます。まさに委員のおっしゃるとおり、このセンターで開かれた催事や発行されたものを中心に、アートライブラリーで収集しております。また、アートライブラリーの目的として、この美術館や劇場の学芸員が十分に調査・研究できるように、他館のものも幅広く情報を集めて、収蔵し、提供しているところでございます。

＜伊藤真理委員＞
利用者の方へも、それが広く提供できるといいなと思うのですけれども、いかがでしょうか。

＜上野管理部長＞
アートライブラリーには、タリカコレクションのように一部のものは貸し出しできませんが、それ以外のものについては貸し出しや閲覧も可能となっております。

＜唐津劇場芸術監督＞
芸術劇場の芸術監督の唐津です。少し付け加えて、御説明させていただきます。
愛知県芸術劇場の自主事業公演は必ず記録を取っております。著作権の取扱いが厳しくなってきている状況はありますが、著作物のアートライブラリーでの閲覧が可能になるようアーティストとの契約の際にお願いし、できる限りの記録を館内で一般の方に見ていただけるよう努力しております。全てとまではいきませんが、これまで31年間の自主事業のほとんどをライブラリーで見ていただくことができます。このような形で劇場の作品やその記録を公開しているのは、日本では他にないのではないかと思います。
また、先ほど説明しました「瀕死の白鳥　その死の真相」という作品を今年の５月にアメリカで上演したのですが、それを見に来ていたニューヨークのリンカーン・ライブラリーから「ぜひ所蔵させて欲しい」と言われ、この作品が所蔵作品に入りました。リンカーン・ライブラリーは世界で最も有名なパフォーミングアーツのライブラリーなのですが、そういった所にも当劇場の作品が入っております。
当センターは複合文化施設ということで、開館当初から連携に関しましては使命のようなものだと考えております。ただ、予算、体制、タイムラインといったものは組織や事業毎に大きく異なっており、これに関してはとても苦労はしておりますが、先ほど説明したように、愛知県美術館さんの企画展の折に、ダンスワークショップを開催したいので一緒にやれないでしょうか、と話を持ち込んでいただきました。そして、事業団として同時期

に連携してプロのダンサー向けのワークショップ事業を行い、発表は美術館と共同でやりましょう、という形で先日、館内の公共スペースなどでそれが実現したばかりでございます。

他にも、色々な貴重なアーカイブ資料をいつでも拝見できるよう、県図書館から許可をいただいているなど、表には見えない形でもたくさんの連携をさせていただいております。

また、センターにはフォーラムといった公共スペースがたくさんあり、そういった場所を使うことが美術館や図書館と劇場を繋ぐような、何か橋渡しにもなると思っていますので、2025 年度事業の中にはセンター全体を使った、様々な場所での公演事業というものを企画しております。一般の方にも無料で気軽に見られるような事業を今以上に発信して、愛知芸術文化センターを活性化していきたいと思っておりますので、ぜひ注視していただければと思います。

＜加藤図書館長＞

図書館からも少し補足をさせていただきます。

アーカイブをしっかり残していくということが図書館の使命でもありますので、貴重な地域資料として、そうしたアーカイブを残していくことを図書館としてやってまいります。

また、連携についてですが、美術館や劇場としっかり連携をして、毎年数回、文化芸術に関する連続講座という講演会をやっています。美術館や劇場から講師としてきていただいて、図書館で芸術文化の講演会をやり、関連する図書を企画展示として見ていただいてさらに理解を深めていただく、そのような取り組みを行っております。

＜平瀬美術館長＞

美術館では、企画展の場合には図録を作っておりまして、これをアートライブラリーにも県図書館にも入れております。また、全国 200 館以上の図書館・美術館にも、相互協力として交換をしております。そうしたことで、アーカイブとして展覧会の記録を残す、それから、年報などで美術展の内容以外のデータを残すということもしておりますので、これに関してはこれからも続けていきたいと思っております。また、我々もそれを使わせていただいて展覧会をするということもありますので、非常に重要なことと思っております。

＜大村座長＞

ありがとうございました。

それでは、予定のお時間となりましたので、本日は以上とさせていただきます。

皆様には、貴重な御意見をいただきましてありがとうございました。本日の御意見は、愛知芸術文化センターの運営にしっかりと生かしてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

以上で、本日の運営会議を終了とさせていただきます。